

鎌倉の谷戸風景に対する価値認識の変化とその要因

大藪 善久¹・中井 祐²

¹非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:oyabu@t.u-tokyo.ac.jp)

²正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yu@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

谷戸は谷地形を意味する言葉であり、本来ならば谷戸は当たり前のように見られるものである。しかし、鎌倉市景観計画のなかで鎌倉の都市景観において欠かせないものとされ、古都保存法では歴史的風土を構成する自然、つまり歴史的な趣があるとされている。また近年、ふるさと感じる里山という価値も認められている。谷という当たり前に見られる環境がいつどのようにして価値を認められるようになったのだろうか。その問いに対して、市民運動が何を守ろうとしたかという調査と朝日新聞記事の記述の分析を行い、谷戸風景に対する価値認識の変化を明らかにした。さらに価値認識の変化の要因に対する考察を行った。

キーワード：鎌倉、谷戸、風景、価値認識

1. はじめに

(1) 背景および目的

谷戸は関東地方で主に用いられる言葉で、台地・丘陵地の内部に向かっていく筋もの谷が入り込んでいる場所の地形¹⁾という意味である。つまり谷戸は谷を意味する言葉であり、本来ならば当たり前のように見られるものである。しかし、鎌倉市景観計画のなかで鎌倉の都市景観において欠かせないものとされ、古都保存法では歴史的風土を構成する自然、つまり歴史的な趣があるとされている。また近年、ふるさと感じる里山という価値も認められている。さらには雑誌で「知られざる桃源郷」²⁾として紹介されている。このように、鎌倉では谷戸が谷地形という以上の価値が認められている。

何故、谷という当たり前に見られる環境が鎌倉において、いつどのようにして価値を認められるようになったのだろうか。この疑問が本研究の背景であり、この問いに答えるため、鎌倉の谷戸風景の価値認識の変化とその要因を明らかにすることが本研究の目的である。

(2) 既往研究

谷戸の景観構造や、市民運動に関する既往研究は多いが、谷戸風景の価値認識や谷戸の風景発見に関するものは存在しない。風景発見に関するものとして、中村良夫

の一連の研究³⁾がある。田園風景と工業景観のそれが有名であるが、田園風景を発見したのは脱農者であり、工業風景を発見したのは脱工者であるという。武蔵野を愛した国木田独歩に代表されるように、ふるさとという心象風景をつくった人はみな農民ではなくて脱農者であった。建設当時、酷評されたエッフェル塔がいまでは観光名所であるように、工業風景は脱工業・情報化時代の人々が見出した。

しかし、中村良夫は風景の発見について言及しているが、風景の共有化については言及していない。つまり個人のレベルを飛び越えて多くの人が共感し、風景を認識するまでのプロセスに踏み込んでいないのである。

風景の共有化にまで踏み込んだ既往研究として、久保田の「美瑛の丘の風景の成立メカニズムに関する研究」⁴⁾や前田の「路地風景の発見に関する基礎的考察」⁵⁾などがあるが、これら二つの既往研究は「いままで見向きもされなかった環境が風景として発見され、社会的な事象を契機・媒体として人々の感情移入が起き、社会レベルの風景として成立した」という仮説に基づき、それぞれの事例を検証し、その過程を追ったものである。久保田の論文では「北の国から」という媒体が、前田の論文では路地の喪失・コミュニティの喪失が、社会的な事象がとして取り上げられている。しかし、この二つの論文は、北海道の美瑛と路地空間という特異な環境を対象としている。

谷戸を扱う本研究は、日本中どこにでも見られるよう

な対象が周りの存在と一体となって風景として認識され、都市景観において欠かせないものとなった事例を扱った研究であり、特殊な対象ではなく、今まで対象とされてこなかった身近なものを扱っている点で久保田、前田の論文と大きく異なる。

2. 作業仮説と方法

当たりまえの風景が価値を認められる経緯として、それが失われる危機に面するということが言われている。これまで当然だと思っていたものが壊されたり、滅びたりする場面に直面すると、自ずと当たりまえだという感覚を白日の下に晒すことになる⁹⁾のだ。鎌倉の戦後から現在を参考文献をもとに表-1に整理した。それを見ると、谷戸が常に開発とその危険にさらされてきたことが分かる。そこで初めて谷戸の価値が認識されたのではないか。さらに破壊行為に対する市民運動が起きるということは、個人レベルではなく、ある程度共有された谷戸の価値が存在していると言える。

以上の仮説を作業仮説とし、本研究では市民運動に着目し、代表的な市民運動である御谷騒動と三大緑地保全運動(台峯、広町、常盤山)がどういった価値を谷戸に認め、何を守ろうとしたかを調査した。さらに社会レベルでどういう価値が認識されているかを明らかにするため朝日新聞記事の谷戸の記述を分析した。その上で考察を行った。

表-1 鎌倉の谷戸に関する戦後の年表

1960	「昭和の鎌倉攻め」と呼ばれる宅地開発ブーム
1964	1月 御谷騒動 近隣住民が反対 2月 御谷騒動 インテリが反対
1965	御谷騒動 ナショナルトラスト実現
1966	古都保存法制定
1973	事業者 広町開発案発表
1986	広町 開発反対6万人署名 鎌倉市緑地保全基金制度発足
1989	市議会において三大緑地における基本方針表明
1995	緑地保全条例制定を求めて22万人署名
1997	市議会が緑地保全条例制定
1998	広町 事業者は開発手続き凍結の解除を請求
1999	景観百選に選ばれる
2003	広町 市が112億8600万円で買収が可決
2005	常盤山 件が特別緑地保全地区として決定の告示
2007	鎌倉市景観計画 台峯 都市公園として都市計画決定され保全決定

3. 調査と分析

以下の調査と分析によって谷戸風景に対する価値認識の変化を明らかにした。

(1) 市民運動における価値認識の変化に対する調査

御谷騒動と三大緑地保全運動において、人々が谷戸に対してどのような価値を認め、何を守ろうとして活動していたのかを明らかにするため、雑誌、陳情書、要望書、回想録を調査した。

調査の結果、御谷騒動の前半と後半で守ろうとしたことが変化していることが明らかになった(図-1)。

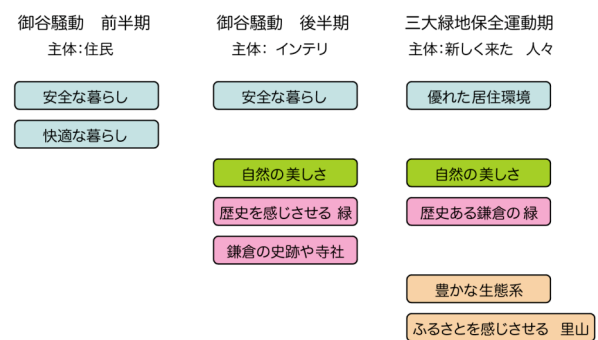


図-1 市民運動が守ろうとしたもの

御谷騒動前半期(1960年～1964年1月)において、マンション開発から御谷を守ろうとした主体は近隣の地域住民である。当時の雑誌には「ノゾキ見られるようで気色が悪い」⁷⁾、「オシメや洗濯物を干されると環境が壊れる」⁷⁾、「工事が始まると危なくて生きた心地がしない」⁷⁾、「山を削ると水害の心配がある」⁷⁾といった苦情があったことが書かれている。このように前半期における守ろうとしたものとは、「安全な暮らし」「快適な暮らし」といったものだった。

御谷騒動が進み全国的な運動になっていく後半期(1964年2月～1966年)に入ると、次第に活動の主体が鎌倉に住む文人や仏門等の教養の高い人々やインテリ層に移っていった。すると、守ろうとしたものが変化する。天野久義氏の回想記には、「山津波の大惨事を起こす危険がある」⁸⁾、「史都鎌倉の面影はなくなる」⁸⁾といった記述がある。また当時鎌倉市に出された陳情書には「歴史の香りを込めた美しい自然の環境」⁹⁾といった記述が認められる。この時期における市民運動が守ろうとしたものとは、「安全な暮らし」「自然の美しさ」「歴史を感じさせる緑」「鎌倉の史跡や寺社」だった。

また、三大緑地保全運動期(1973年～2007年)では、開発に反対した主体は、緑地が破壊されて宅地造成された

所に新しく移り住んできた住民達である。陳情書には、「生物多様性の確保」¹⁰⁾「農地と水辺の織りなす谷戸本来の自然」¹⁰⁾「美しい自然に囲まれて暮らす喜び」¹⁰⁾といった記述があり、保全が決まった広町緑地の基本コンセプト(<http://www.hiromachinomori.org/hiromatikonseputoindex.htm>)には「歴史ある鎌倉の緑」「古都のイメージを支える都市林」と書かれている。このように、「優れた居住環境」「自然の美しさ」「ふるさとを感じる里山」「歴史ある鎌倉の緑」「豊かな生態系」を守ろうとした。

このように、鎌倉の谷戸に対する認識が生活環境のみの状態から御谷騒動後半では歴史的なコンテキストが付加され、さらに三大緑地保全運動では豊かな生態系や里山といった新しい価値が付加されたことが明らかになった。

(2) 朝日新聞記事における価値認識の変化に対する分析

a) 分析方法

戦後から現在までの朝日新聞記事から谷戸に関する記述を抽出し、分析を行った。以下その方法である。

1945年から現在までに朝日新聞に掲載された記事のうち、鎌倉について書かれた記事で、本文もしくは見出しに「谷戸」が登場している記事を朝日新聞記事検索システム「聞蔵」で検索した結果、37件の記事を得た。

37件の記事から谷戸に関する記述を抽出し、さらに谷戸に対する記述内容を分類し以下の8つのカテゴリーに分類した。

A:歴史 B:自然 C:静けさ D:鎌倉特有 E:里山 F:原風景 G:生態系 H:居住環境

b) 分析結果

上記の方法で分析した結果が表3である。

表-2 分析結果

	1964	1970	1974	1980	1988	1995	2004
A	1	1	1	1		1	1
B	1	1	1	1		4	2
C	1	1	1	1		1	2
D				1	1	1	1
E					2	1	1
F					2	1	1
G						1	1
H						1	1

「A 歴史」「B 自然」「C 静けさ」といった記述は1964年から登場し、「D 鎌倉特有」という記述は1980年から登場している。「E 里山」「F 原風景」という記述は1990年になってようやく登場し、「G 生態系」「H 居住環境」という記述は、1995年以後に登場している。

また、全体の傾向として1990年以降、谷戸に関する記事が増えている。それに伴い、それまでは全くなかった「E 里山」「F 原風景」「G 生態系」「H 居住環境」とい

たものが新たに見られ、多く言及されるようになっていくことが明らかになった。

4. 考察

市民運動の調査と、朝日新聞記事の分析をまとめると(図2参照)、市民運動の後で朝日新聞記事の記述における価値認識が新しく付加されていることが分かる。それは開発行為に対する市民運動が要因となって新しい価値が広く認識されていることを表している。さらに市民運動の活動主体が地域住民からインテリ層、そして新しく来た人々と変化し、それに伴い市民運動で守ろうとしたものも変化している。また御谷騒動は高度経済成長期、三大緑地保全運動はバブル経済期と、社会全体で開発行為が行われていた背景がある。

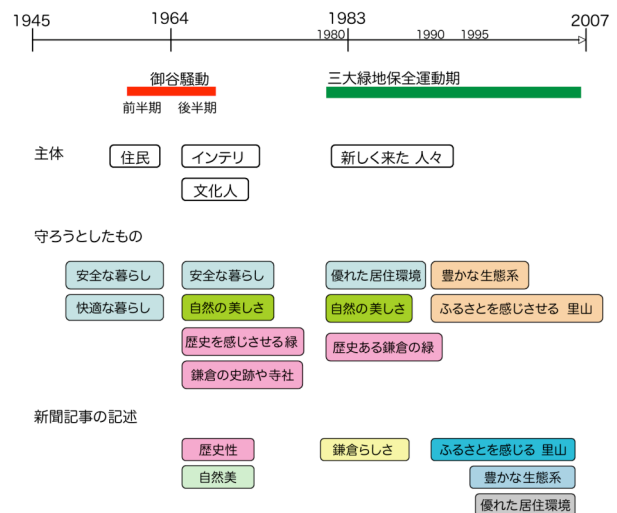


図-2 調査と分析のまとめ

以上をもとに、鎌倉の谷戸風景に対する価値認識の変化は次の四段階で進んだと考えられる。

a 「近隣住民の運動は、谷戸を風景として見るものではなかった。」

御谷騒動前半期で守ろうとしたものは、安全な暮らしや快適な暮らしである。つまり、谷戸を風景としてではなく、生活環境の一つとして捉えている。

b 「インテリや文化人が、歴史や自然を代表するものとして保全運動をすることによって、歴史や自然美という文脈で谷戸が風景として見られるようになった。」

御谷騒動後半期になり、インテリや文化人が新しく歴史や自然を代表するものとして谷戸の価値を認めた。その運動の結果、新聞記事でも歴史や自然美を感じるもの

として記述された。

c 「鎌倉の緑にひかれてやって来た新住民が、歴史性などではなく、より一般化した価値に基づいて活動した。そして、ふるさと、里山、豊かな生態系といった、いままでと異なる価値を見出した。」

三大緑地保全運動期ではいままでと異なる価値が見出された。ふるさとや里山や豊かな生態系といった価値は、鎌倉の谷戸にしかあてはまるものではなく、全国各地の里山で言われ始めた価値である。

d 「現在の鎌倉の谷戸風景はそういった様々な価値が混在している。」

その結果、鎌倉の都市イメージや都市景観において欠かせないものとなっている。

謝辞

本論文を書くにあたって、鎌倉市役所の方をはじめ非常に多くの方にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- 1) 鎌倉市, 鎌倉市緑の基本計画, pp.190, 2006
- 2) 新潮社, 旅, 6月号, pp.173, 2005
- 3) 中村良夫, 風景を創る 環境美学への道, NHK出版, 2004
- 4) 久保田幸依, 美瑛の丘の風景の成立メカニズムに関する研究, 景観・デザイン研究講演集 No.2, pp.1-5, 2006
- 5) 前田翔三, 路地風景の発見に関する基礎的考察, 景観・デザイン研究講演集 No.3, pp.210-214, 2007
- 6) 西村幸夫, 「都市風景」の生成 -近代日本都市における風景概念の成立-, ランドスケープ研究, No.69(2), pp.118-121, 2005
- 7) 草柳大蔵, 古都鎌倉の苦悩, 日本交通公社, 旅, 6月号, pp.173, 1965
- 8) 天野久義, いざ鎌倉 御谷騒動回想記, pp.14
- 9) 天野久義, いざ鎌倉 御谷騒動回想記, pp.21
- 10) 陳情第31号, 1994年12月5日
- 11) 鎌倉市HP <http://www.city.kamakura.kanagawa.jp/>
- 12) 鎌倉市景観計画
- 13) 鎌倉市史編纂委員会編, 鎌倉市史 総説編, 吉川弘文館, 1972
- 14) 熊澤輝一 原科幸彦, 都市近郊における住民と大規模緑地との関係の成立と変容—鎌倉市広 町緑地の運動事例—, 環境情報科学論文集 Vol.19, pp.211-216, 2005
- 15) 朝日新聞記事 37件